

令和六年度 札幌市立あやめ野中学校
第三十六回 卒業証書授与式

式 辞

札幌市立あやめ野中学校
校長 大 高 雅 子

遺跡の森の木々の隙間から見える青空が、真冬とは違うまぶしい光を放つようになり、今年もこうして門出の春を迎えることができました。

第36回の卒業証書授与式で本校を巣立つ皆さんは、小学3年生で北海道胆振東部地震、小学4年生の終わりからは3年余りの新型コロナウイルスの流行という世界規模の災害を経験し、中学2年生の5月から、ようやく活動制限のない中学校生活を送ることができました。

語りつくせぬ9年間の義務教育を卒業する今日、保護者の皆様、地域の皆様のご臨席を賜り、ともに祝える喜びをかみしめています。

3年生のみなさんは、この9年間で何を得ることができましたか？

私は地震やコロナ禍を通して得たことがあります。それは、どのようなことについても、自分ならどう行動するかということを、本当に真剣に考えられるようになった、ということです。コロナ禍以前までは、物質的な豊かさはいつでも身近に得られるものとしてあり続け、特別なことをしなくても、安全が保障された世界に自分は生きている。例え、故障が起きたり壊れたりすることがあったとしても、特別な技術をもった人が速やかに復元してくれるだろうと、漠然と思っていました。

しかし今は、物質的なことはもちろん、「人の手」が足りていないということを感じる事が多くなりました。水道管の劣化による破損事故や、なかなか消火できない山火事のような災害のニュースを見ていると、今のよう高度に進化したデジタル社会にあっても、「人の手」による技術力が必要な危機がたくさん起きていることを感じます。

そしてあらためて、人間の強みに勝るものはない、という思いになります。

私はいつも思い出します。地震の停電で水が出なくなった時、水をバケツにためて少しずつ分けて使っていたこと。家にある布で同僚のマスクを縫ってきてくれた先生がいたこと。灯りで医療従事者の方への労いを伝えた夜のこと。困難な中で発揮されたたくさんの人の優しさ、粘り強さ、行動力。いいえ、困難に遭ったからこそ知ることができた人間の強み。この記憶が、あれからずっと自分の中で生き続けていることを感じています。

私たちは、おそらくこれからも幾度となく課題や困難なことに出合うと思いますが、

工夫して解決したり、仲間と協力して乗り越えたりしたという記憶が、自分を支え励まし、スレスレのところで救ってくれる力になると信じています。

人間の強みとは、予測できないこと、経験していないことであっても、何とかしようとあきらめず、仲間と知恵を出し合いながら、100点でなくても、それに近い解決に辿りつけるように、取り組んでいけることなのです。それは、はじめから才能に恵まれることよりも、もっと、強く逞しい力になると思っています。

私たちはいつも損したことの方を考えます。しかし、大切な何かを得ているはずなのです。

義務教育の9年間で、自分が何を得たのかを振り返り、自分の解釈で命と意味を与え、人生の中で使いこなしていったほしいと思います。それは、あなたが、自分の心に橋を架けるといことです。乗り越えられないと思うことであっても、心に架けた橋を使い、人や世界とつながって変えていくことができるのです。

確かなことは、「自分と未来は変えることができる」ということです。

保護者の皆様

今日、子どもたちは義務教育を終えます。これからも予測できない未来を生きていく力をつけるため、引き続き大きな愛で支えてくださるようお願いいたします。

最後になりますが、本校の校歌に、「若人は心に刻む 人の世の平和の尊さ」という言葉があります。「人の世の平和」とは何でしょうか。みなさんの心の中に、揺るぎない芯をもてるように、優しさという強さを育てていけるように、そして、大切な愛を守っていけるように、願っています。その心で、一人一人が尊い平和をつくっていく力になっていくことを信じています。

あなたたちのふるさとは「あやめ野」です。多くの人たちとのつながりをつくりながら、未来へ向かって逞しく歩んでいくよう願って、本校「第三十六回卒業証書授与式」の式辞といたします。

令和七年三月十四日